

2024年度 学外活動応援奨学金 報告書

イギリスにおける中産階級の邸宅調査



中央大学 文学部人文学科 西洋史学専攻 3年
22E2326016F 根岸由奈
提出日：2024年12月7日

イギリスにおける中産階級の邸宅調査

中央大学 文学部 人文社会学科 西洋史学専攻 3年 22E2326016F 根岸由奈

目次

I はじめに：調査活動について

1. 自身の研究について
2. 調査目的
3. 前提
4. 基礎情報—私的空間と公的空間、部屋の名称について
5. 渡航概要

II 訪問施設分析

1. Museum of the Home
 - 1-1. 施設概要
 - 1-2. 調査結果
 - 1-3. まとめ
2. Charles Dickens Museum
 - 2-1. 施設概要
 - 2-2. 調査結果
 - 2-3. まとめ
3. Sir. John Soane's House
 - 3-1. 施設概要
 - 3-2. 調査結果
 - 3-3. まとめ
4. Dr. Johnson 's House
 - 4-1. 施設概要
 - 4-2. 調査結果
 - 4-3. まとめ
5. Dennis Sever's House
 - 5-1. 施設概要
 - 5-2. 調査結果
 - 5-3. まとめ
6. Sambourne House
 - 6-1. 施設概要

6-2. 調査結果

6-3. まとめ

7. Leighton House

7-1. 施設概要

7-2. 調査結果

7-3. まとめ

8. Kenwood House

8-1. 施設概要

8-2. 調査結果

8-3. まとめ

9. Wallace Collection

9-1. 施設概要

9-2. 調査結果

9-3. まとめ

III.おわりに

1. 調査を通して

2. 今後の研究について

3. 結び

4. 参考文献

I はじめに：調査活動について

1. 自身の研究について

私は卒業論文で、ヴィクトリア朝時代の中産階級の女性の家庭におけるイデオロギーを取り上げようと考えている。徐々に解消されているとはいえ、いまだに残る「家庭は女性の空間である」という考えがイギリスにおいて広く浸透したのはヴィクトリア朝時代であることはよく知られている。この考えが形成された背景を探ることは、現代に残る男女不平等を深く理解するために必要不可欠であると考えたため、このトピックを取り上げたいと考えた。

このようなヴィクトリア朝イギリスで生まれた「家庭の天使」として女性を家庭に縛り付けるイデオロギーが浸透したのは産業革命による家庭と仕事場の分離、福音主義の影響による家父長制などの影響があると言われている。彼女たちは貞節、従順、沈黙を遵守し、家庭の中で子を正しく養育し、公的な場で活動する夫の避難場所を作り上げることが求められていた。そうして、女性は家庭という私的領域にとじ込められ、男性は政治や法、金融といった公的領域で働くという構図ができあがった。しかし、現在の研究ではこの男女の領域分離は無意味である、また、私的領域と公的領域で二分するのではなくその間に中間の領域があるのではないかという研究もある。¹当時の女性は確かに男性と活躍する場は異なっていたが、慈善活動や社交を通して確かに影響力をもっていた。私は私的領域と公的領域は二分することができないという立ち位置で研究を進めている。

2. 調査目的

本調査報告書は2024年10月28日から11月7日にかけて行った調査活動の記録である。調査目的は私的領域かつ女性の領域とされていた家庭空間を見直すことである。私は私的領域・公的領域と男女領域の関係を研究する中で、まず今まで考えられてきた私的領域＝女性領域、公的領域＝男性領域であることを見直す必要があるだろう。そこで私的領域、そして女性の領域の中心である家庭を調査することで、女性が実際に家庭内で発揮していた影響力を読み取り、私的領域＝女性領域という考えを自分の解釈で分解することができると思った。また、自分の目で歴史の現場を目撃することは、研究

¹ 男女の領域分離が無意味と唱えているのは Vickery、男女の領域分離を考える上で私的領域と公的領域の間に社会的領域という層があったと唱えるのが Jameson が挙げられる。

にオリジナリティを出す糸口にもなるだろう。歴史研究においては一次史料も扱うが、2次資料の割合が多くなりがちであるため、オリジナリティを出すのが難しい。

本調査では博物館を含む8つの施設を見学しながら、家庭内における社交のあり方と女性の役割に着目し、卒業研究の精度を高める助けとしたい。また、家庭内における社交に着目するため、訪問施設（博物館を除く）の調査結果では Dining Room、Drawing Room、Palour、Breakfast Room などのいわゆる応接室や居間にあたる部屋に絞って紹介する。

3. 前提

私の研究対象はヴィクトリア朝中産階級である。今回見学した施設は、ヴィクトリア朝に当てはまらない、また中流階級ではなく上流階級であるなど、必ずしも研究対象にあてはまらないが、それは比較研究のためである。また、掲載写真の多くは自身の撮影、パンフレット掲載写真を撮影したものである。一部、画質の問題や写真撮影禁止の施設があったこともあり、インターネット上の画像を使用している。

4 渡航概要

・調査活動期間：2024年10月28日（月）から11月7日（木）

※イギリス滞在期間 2024年11月29日（火）から11月6日（水）

・対象地域：イギリス、ロンドン

・主要訪問施設

- ・ Museum of the Home
- ・ Charles Dickens Museum
- ・ Sir John Soane's House
- ・ Dr. Johnson 's House
- ・ Dennis Severs' House
- ・ Sambourne House
- ・ Lighton House
- ・ Kenwood House
- ・ The Wallace Collection

・利用航空会社：ベトナム航空

・航空機航路：

往路 羽田空港→ハノイ・ノイバイ国際空港→ロンドン・ヒースロー空港

復路 ロンドン・ヒースロー空港→ハノイ・ノイバイ空港→羽田空港

・宿泊場所：

10月29日から11月2日まで 4泊

Tower Bridge Rainbow Suites 住所・Cartwright Street, ロンドン, E1 8LY

11月2日から6日まで 4泊

St. David's Hostels Paddington 住所・14 - 20 Norfolk Square, ロンドン, W2 1RS

・活動行程

※現地時間で記載

10/28 (月) 16:35 日本発

10/29 (火) 7:15 ロンドン着

10/30 (水) Charles Dickens Museum

10/31 (木) Sir John Soane's House

11/1 (金) Dennis Severs' House

Museum of the Home

11/2 (土) Kenwood House

11/3 (日) Sambourne House

11/4 (月) Lighton House

11/5 (火) The Wallace Collection

11/6 (水) 11:00 ロンドン発

11/7 (木) 15:05 日本着

II 訪問施設分析

1. Museum of the Home

1-1 施設概要

1714年にSir Robert Geffryeの寄付金によって建てられた老人ホームが1911年にジェフリー・ミュージアムとして開館



歴史

1914年～	家具と木工品の博物館
1930年代～	家庭生活の歴史
2018年	閉鎖
2019年	Museum of the Home として再び開館

Museum of the Homeには家庭生活や日常生活にかんする約40,000点の物品、アーカイブ資料、写真、書籍が所蔵されている。²Room Through Timeという展示では1630年代から2049年まで、12部屋のモデルルームが展示されており、過去だけでなく、現在や未来の家庭のあり方について学ぶことができる。庭についても、1550年代から21世紀までの変化を展示しており、イギリスにおける庭と家の密接な関係を伺い知ることができる。Museum of the Homeはこれらの過去400年間の人びとの家の建設、維持、居住の記憶を通じて家の概念を探る。

1-2. 調査結果

○コレクション

コレクションの展示では家具や調度品の展示と共に当時の家具の流行について説明されていた。時代に沿って流行を説明しつつ、展示品を紹介したい。

² Museum of the Home, *Our Collection*,

<https://www.museumofthehome.org.uk/explore/our-collections/>, accessed :

2024/11/26

1700年代—politenessの時代

1700年代の人びとは礼儀正しさを重要視し、家庭内でも調和を保つことを意識した。そのため、豪華なデザインよりも質素なデザインを好み、自制心を示すこと勧めた。



左にあるのは1760年から1800年に使用されていたとされるマホガニー製の椅子であり、筆記する際に使用されていた。当時の流行通り、装飾はほぼなく、シンプルなデザインとなっている。



左にあるのは1750年から1770年に使用されていたティーセットである。お茶を飲む儀式は丁寧な行動として不可欠であり、各家庭でたしなまれた。

お茶の歴史について

1860年代から1900年代まで—artisticな時代

この時代ではアーツ・アンド・クラフト運動やジャポニズムの流行などにより、新たなスタイルが生まれた。また、アイデンティティと所有物が密接に関わる時代であり、自分が優れていることを示すために芸術的な家具が好まれた。



左は1866年につくられたアームチェアで、Morris, Marshall, Faulkner & Co のために Philip Webb がデザインした。この椅子はベストセラーとなり、他企業にもデザインをコピーされるほどだった。1700年代の椅子と比べても、豪華になっていることが分

かる。右は 1870 年から 1920 年におそらく Morris & Co で売られたロセッティ・アームチェアである。こちらは色あせてしまっているが、もともとグリーンベルベットの椅子であり、やはりデザイン性が見られる。このアームチェアは比較的安価で長期的に生産された。この時代の椅子の例として、1700 年代のような筆記のための椅子でなく、このようなくつろぐためのアームチェアがよく見られたことは、この時代、主にヴィクトリア朝に定着した「安らぎの場」としての家の概念が関係していると思われる。

「はじめに」で説明したように、男性は公的領域で、女性は私的領域で過ごすという考えが浸透すると、女性は公的領域で戦う男性を癒やす存在となることが求められ、同時に家は「ホーム・スウィート・ホーム」のような暖かな家庭を築くことが求められた。



上の 2 つは 1876 年に Royal Worcester 社が製造したティーポット（左図）とティーカップ（右図）である。幾何学模様や扇子、竹などがプリントされており、日本の様式が取り入れられており、当時のジャポニズムの流行がうかがえる。



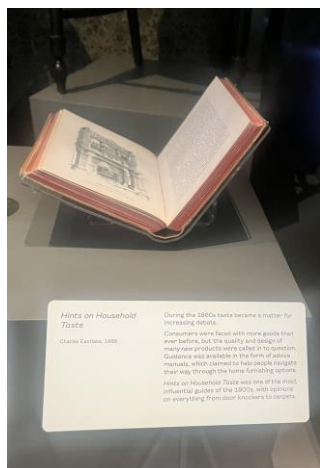
3

https://collections.museumofthehome.org.uk/assets/3/94/12493/v0_websize_large.jpg

4

https://collections.museumofthehome.org.uk/assets/4/05/12504/v0_websize_large.jpg

また、この時代の展示には家具のカタログが多く展示されていた。産業革命により工業化・量産化が行われたため、「選んで買う」ことが可能になったのである。⁵このカタログを主に見ていたのは女主人である。多くの女性向け雑誌や家庭書に家具の選び方を教える、また新たな装飾の提案をする連載があったことから、そう言えるであろう。⁶下図が実際に 1868 年に出版されていた、家具について言及している家庭書である。



○Room Through Time

Museum of the Home では時代に沿って、人びとが暮す家を見ることができる。ここでは 14 部屋あるうち、1745 年、1790 年、1830 年、1878 年の 4 部屋を取り上げ、部屋と家族の関係の変化を確認したい。

1745 年の Parlour

⁵ 吉村典子/川端有子/村上リコ、『ヴィクトリア時代の室内装飾 女性たちのユートピア』,2013 年, p 63

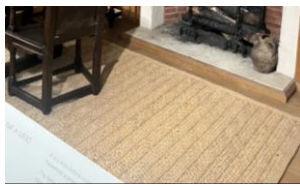
⁶ 同上書, p 63



2人の使用人が早朝に、この部屋で開かれる中産階級女性のアフタヌーンパーティーのために準備をしているという設定のもとつくられた部屋である。1700年代の politeness の重要視が体现されているように、家具はどちらかというとシンプルなものが多い。また、この写真からは見ることができないが、暖炉の上には鏡が飾られている。これは1700年代に広く普及したもので、夜に室内のろうそくの光を反射するのに役立った。

1790年の Parlour

⁷ <https://www.museumofthehome.org.uk/media/ptadezwp/1745-room-setting.jpg?width=1500&upscale=false>



夕方の早い時間にここに住む中産階級の家族が親戚や親しい家族の友人をもてなし、午後5時ごろに提供された夕食後にカード遊びをしているという設定です。この展示の説明には女主人が夕食用の食糧を買うために買い物に出かけ、帰宅すると家計簿をつけたという記述もあり、女主人が担う仕事のひとつに家計の支出管理があったことを示している。1745年のParlourに引き続き、比較的シンプルなデザインである。変化といえば、壮麗な絨毯が敷かれ始めたということだろう。これ以前の部屋は基本的にフローリングであったが、今後は絨毯が敷かれるようになる。1630年の部屋にも絨毯が敷かれていた（左下図）が、明らかに質が異なり、当時の繊維工業の発達が感じられる。

1830年のDrawing Room



中産階級の家庭の午後、母親と娘がくつろいでいるという設定である。母親は月刊誌を読んで最新のファッションについて学び、長女は水彩画の練習を、次女は手紙を書きながら、兄が帰宅したらチェスをするために盤を用意しているという。

明らかに以前までの部屋に比べて装飾性が増したことが分かる。例えば、暖炉前のファイヤースクリーンというインテリアや壁に飾られた絵画の数などである。上述したように、この頃になるとインテリアデザインをアドバイスする出版物も出版され、関心が高まっていた。

また、1830年は19世紀中頃には完全となった「家庭重視イデオロギー」が浸透している途中であり、女性に「家庭の天使」というイメージが付き始めた時代でもあった。それに伴い、家庭は女性によって居心地のよい部屋がつくられることが求められた。写真には写っていないが、部屋にソファが登場したことがそれを示しているだろう。（下図）1800年代初頭から使われるようになったソファは家がくつろぐための場所となった変化を顕著に示している。



8



9

1878 年の Townhouse



この部屋は Dr. Arunima Datta の Townhouse がモデルとなっており、ロンドンに建てられた中産階級向けの典型的な住宅である。この家は4階建てで、主に使用人は屋根裏で寝ていたとされている。

この家の設定は Bunoo というインド人の乳母が契約を終了し、荷物をまとめているというものである。Bunoo は Ayah と呼ばれる様々民族宗教グループ（主にインド）から来た旅する女性で、彼女たちは社会的に不安定な立場であった。1877年にヴィクトリア女王統治下のもとインド帝国が成立したことにも関係しているのだろうか。

また、この部屋には子供用のおもちゃが見られる。1870年代までに、子ども時代は人生で大切にすべき楽しい時期という認識が形成され、家は子どもを養育する場としても重要視された。それ以前は子どもとは不完全な大人という認識であり、特別に愛情を注ぐ対象ではなかった。左下図のような感情的な絆を持つ家族像が生まれたのは19世紀に入ってからのことである。

⁸ <https://www.museumofthehome.org.uk/media/ai0j5xth/1830-header.jpg?width=1500&upscale=false>

⁹ https://www.museumofthehome.org.uk/media/02phjb1s/2_1937_001-1.jpg?width=1500&upscale=false

1-3 まとめ

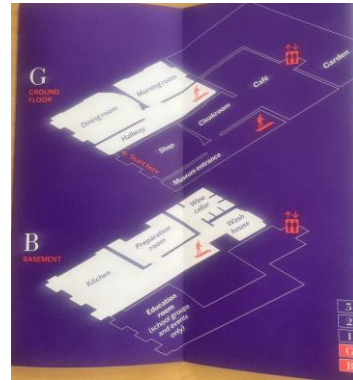
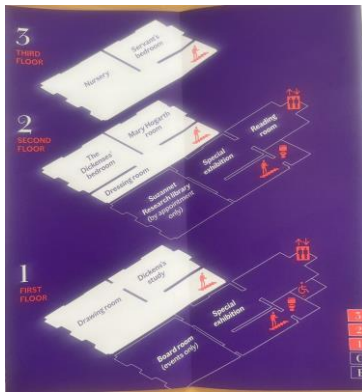
ヴィクトリア朝に至るまでの家への概念の変化を学ぶことができた。ヴィクトリア朝以前は politeness が重視され、社交の場として機能する面が強かったが、ヴィクトリア朝以後は家庭重視イデオロギーが普及すると共に、公的領域で勤める男性の避難所や子どもたちの養育の場としての機能が求められるようになっていった。そして、女性はこの機能を正常に運営することが求められた。博物館には女性イデオロギーについての記述や母親と子どもが描かれた絵画、女性向けの家庭用本など、女性に関するものが多く展示されており、家と女性の密接な結びつきがうかがえた。

2. Charles Dickens Museum

2-1. 施設概要



「クリスマス・キャロル」や「オリヴァー・ツイスト」で知られるチャールズ・ディケンズ〈1812年～1870年〉(右写真)が妻子とともに1837年から1840年まで住んだ邸宅。この建物はヴィクトリア朝初期の家庭として保存されている。いわゆるタウンハウスと呼ばれる形式のもので、彼の邸宅は地下一階と地上4階で構成されている。間取りは以下の通りである。ここでは1階にあるDining RoomとMorning Room、2階にあるDrawing Room、そして使用人が生活したBasementを取り上げる。この邸宅は年代、階級、家族構成ともに条件に当てはまる対象であり、大いに参考になるだろう。



2-2. 調査結果

○Dining Room



Charles Dickens は人を招くのを好み、この部屋でも多くの客人を食事とともにもてなした。

また、実際の壁紙はこのような明るいブルーではなかった。当時のロンドンは埃などが舞い、壁紙もすぐに暗くなってしまうためこのような明るい色は人気でなかった。壁紙がこのような明るくなかったと考えると、この部屋は実際はもう少し厳格さをもつ部屋になるのではないかと考える。

○Morning Room



10

https://media.cntraveler.com/photos/5a7b50d3500bcc15504a7538/16:9/w_1920,c_lim

妻であるキャサリン・ディケンズが手紙を書く、または親しい友人をもてなすためにこの部屋を使用していたという。写真からは確認できないが、東側に窓が付いており、午前中は光を多く取り入れることができるため、Morning Room と呼ばれる。暖炉の上に大きな鏡があり、1700年代の流行が残されたようである。

○Drawing Room



チャールズとキャサリンはこの部屋で客をもてなし、ゲームなどをしたという。派手すぎないが、燭台やファイヤースクリーンにはある程度の装飾があり、上品な空間になっている。また、ピアノが置いてある。当時は客を招いたとき女性が演奏をして客を楽しませることが一般的であり、中産階級のステータスシンボルとなっていた。¹¹

○Basement (Kitchen, Preparation room, Wine cellar, Wash house)

it/Charles-Dickens-Museum_2018_Morning-Room-Credit,-Newangle-Copyright,-Charles-Dickens-Museum.jpg

¹¹ Cha Tea 紅茶教室, 『図説 ヴィクトリア朝の暮らし』, 2015年, p 85



階下に行くと、上の階とは全く異なる簡素な空間が広がっていた。装飾やファブリック製品は全く見られない。ディケンズはコック、ハウスマイド、乳母の3人の使用人を雇っていた。3人が働くには十分な広さではあるが、上階とのあまりにももの違いに当時の使用人と雇用主の格差を思い知った。また、棚にはジャポニズムやシノワズリの要素が見られる食器が置いてあり、かなり広く流行していたことが分かる。

1-3. まとめ

Charles Dickens の邸宅は Museum of the Home で見た 19 世紀後半の邸宅に比べ、装飾性に欠け、上品な雰囲気であり、ヴィクトリア朝的な所狭しと並ぶインテリアデザインではなかった。しかし、Morning Room と Drawing Room にはソファが置いてあるなど、居心地の良さと社交性が合い混じった邸宅であった。また、使用人と雇い主の生活環境の違いも目の当たりにした。

3. Sir. John Soane's House

3-1. 施設概要

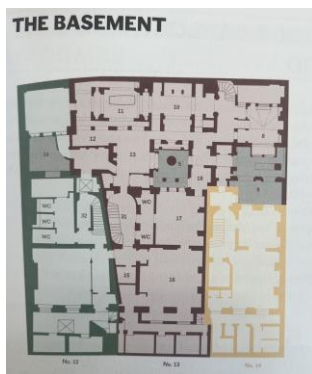


12

建築家 Sir. John Soane〈1753 年～1837 年〉
(左下図) の自宅であり、博物館と図書館、
建築事務所も兼ねていた。1792 年から 1823
年にかけて、彼は Lincoln's Inn Fields に並ぶ
12 号、13 号、14 号の 3 軒の家を購入し、す
べて取り壊して建て直したものが現在のも
のである。12 号は 1813 年まで居住していた
が、13 号が改築されたのち彼は 13 号に居住
を移し、12 号は賃貸された。また、1824 年
から 14 号が改築され、一部を除いて下図の
黄色い部分は家として貸し出されていた。
1815 年に彼の妻が亡くなってからは使用人
を除き、一人で住んでいた。彼自身が死後こ
の邸宅がそのまま保存されるよう定めたた
め、現在もほとんど看板やパネルなどが
ない状態で、壁紙もほぼそのままに保
存されている。ここでは 1 階の Dining Room-Library と
Breakfast Room、2 階の North Drawing
Room、South Drawing Room、地下の Kitchen
をとりあげる。この邸宅は私の研究対象より
もやや早い時期の邸宅であるが、階級と家族
構成は一致しているため、研究対象の邸宅に
比べたときの時期による部屋の変化を調査
したい。

12

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/9/9f/Thomas_Lawrence_John_Soane.JPG



3-2. 調査結果

○Dining Room—Library



この部屋は13号の部分に当たり、改築は1813年に終了した。そのため、ヴィクトリア様式ではなく、そのひとつ前のジョージアン様式にあたる。ジョージアン様式の特徴は左右対称性であるが、それはこの部屋にも当てはまり、格調高い部屋であった。この部屋は建築家、もしくは建築教授として客をもてなすために使用された。そのためか、ソファなどが置いてあるが、居心地の良さというよりも厳格さが部屋であった。

○Breakfast Room



Sir. John Soane の Breakfast Room は光が多く入るような設計でなかった。窓は中庭に面したものと小さな天窓しかなく、やや薄暗い。ソファなどは置いておらず、やはりここも居心地の良さを感じるような空間ではない。

○North Drawing Room South Drawing Room



当時の流行色であった Turner's patent yellow の壁紙と大きな窓の効果で、明るく朗らかな空間となっている。ここは John Soane 夫人によって客の接待に使用された。そのほかの Drawing Room でも見られるように、大きな窓が取り入れられ、明るく軽やかな雰囲気である。¹³

○Kitchen

¹³ 前掲書, p 62



やはり階上に比べても、簡素な作りであり、ジャポニズム・シノワズリの食器が飾ってあった。また、雰囲気は Charles Dickens Museum の Kitchen とほぼ変わらずであった。

3-3. まとめ

博物館や建築事務所という機能も兼ねていたためか、居心地の良さというよりも厳格さや圧迫感を感じた。また紹介してはいないが、邸宅の半分が博物館として美術品が展示されており、居間や客室を含めても他者に見せるための家というイメージが強かった。しかし、Charles Dickens の Drawing Room と Sir. John Soane のそれはかなり似通っている部分が多かった。広い空間、大きな窓、多すぎない調度品などである。両者とも Drawing Room は私的にではなく、公的に利用していたようである。

4. Dr. Johnson 's House

4-1. 施設概要



14

A Dictionary of the English Language (1775 年) の著者として有名な Samuel Johnson (1709 年～1784 年) (上図) の邸宅である。17 世紀末にロンドンの羊毛商人 Richard Gough によって建てられたタウンハウスであり、彼は辞書の執筆のために 1748 年にここに移住し、1759 年に去った。1 階には受付と Palour、2 階には Withdrawing Room と BedChamber、3 階に Library と Guest Room、4 階は展示室になっており、Dr,Johnson が手がけた英語辞典を見ることができたり、また当時の紙に羽根ペンで文字を書く体験ができたりした。1752 年に妻であるエリザベスが亡くなるまでは、一緒に住んでいた。ここでは Palour と Withdrawing Room をとりあげる。Sir. John Soane Museum と同様、私の研究対象よりも以前の人物であるが、比較研究のために取り上げた。

4-2. 調査結果

○Parlour

14

https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/2/20/Samuel_Johnson_by_Joshua_Reynolds.jpg/1200px-Samuel_Johnson_by_Joshua_Reynolds.jpg



彼を訪れた客はまずこの部屋に案内された。18世紀はスモッグや衛生環境が整っていなかったために下層階は汚れが目立たないような色にしてあった。また、この部屋は客室としてだけでなく、居間としても機能しており、暖炉の右側には Powder Closet というかつらをしまうためのクローゼットがあった。公的空間と私的空間が共存している部屋である。

○Withdrawing Room



伝統的に、夕食後は女性たちは男性たちから離れ、この Withdrawing Room に席を移すことが一般的であった。

4-3. まとめ

18世紀後半の邸宅ということもあり、装飾性がなく、上品な邸宅であった。また、Parlourの機能や Withdrawing Room に（Samuel Johnsonのものではなく、友人であり居候していた Anna Williamsのもの）が隣接しているなど、私的空間と公的空間の境が曖昧であることが興味深かった。これは Samuel Johnson が妻の死後、多くの友人と同居していたことにも関係するだろう。この友人のなかには Anna William などの女性の客人もあり、男女混合のサロンを自宅で開いていた。下図がその様子を描いた絵である。



5. Dennis Severs' House

5-1. 施設概要



この邸宅はカリフォルニア出身のアーティストである Dennis Severs（上右写真の中の中心の人物）が 1979 年に 1742 年に建てられたこの家を買取り、18 世紀にロンドンへ移住してきた架空のユグノーの絹織工一家の邸宅を再現したものである。地上 4 階、地下 1 階からなるタウンハウスであり、各階に約 2 部屋ずつ設けられていた。室内は食べかけの食事や脱ぎかけの服があり、今の今まで人が暮らしていたように感じられた。再現されている年代としては Sir. John Soane's House や Dr. Jonson's House が近いだろう。これらと比較しながらジョージアン様式のインテリアのイメージをかため、ヴィクトリア様式のインテリアとの決定的な違いを見抜きたい。館内は写真撮影が禁止のため、インターネット上にある画像を用いて紹介していく。また、館内において部屋の詳細な説明もとくにないため、私が持ち合わせる知識で説明していく。ここでは Kitchen、Dining Room、Drawing Room、Palour をとりあげる。

○Kitchen



15

館内は照明は一切なく、ろうそくのみで照らされていた。私が訪れたのは昼頃であったが、地下にあるキッチンは非常に薄暗く、テーブル上にあった記述を見るためにはかなり目を凝らさなければ見ることができなかった。このような環境での労働を強いられた使用人が不満を持つのも理解できる。

○Dining Room

¹⁵ <https://lookup.london/wp-content/uploads/2016/12/Photo-16-11-2011-12-46-54-1024x681.jpg>



○Drawing Room

同じく 1 階に位置するのがこの部屋であり、ここは Drawing Room であると考え。なぜならここは Dining Room のすぐ隣に位置し、Dining Room とも扉でつながっているからだ。Drawing Room はくつろぐための部屋として知られ、「女性主導の部屋」としても知られる。そして、Dining Room で食事を終えた後、女性たちがその場を離れ、歓談する場でもある。花柄の壁紙や女性の絵が多く飾られるなど、女性らしさを感じられる部屋のため、Drawing Room であると認識した。

他の部屋に比べて規律のある部屋であり、かつ一階に位置していることから、Dining Room であると判断した。部屋の中心に食事のための大きなテーブルがあることも Dining Room のひとつの特徴としてあげられるだろう。

¹⁶ <https://encrypted-tbn0.gstatic.com/images?q=tbn:ANd9GcSm95-dkNAdTjU4GU3KZ6r7Tf6ADA11tRasfmdf41JPS4D1lehR2Fd43I9NY6p-fyIsfU&usqp=CAU>



17

○Palour



18



19

ここは2階に位置する部屋であり、客人が椅子に座りながら暖炉の周りでくつろぐ様子が想像できる。暖炉前のサイドテーブルには飲みかけのティーセットが置いてあり、お茶とともに歓談をしていたのだろう。

¹⁷ https://oldspitalfieldsmarket.com/cms/2017/10/DSH-Victorian-room-Roelof-Bakker_web.jpg

¹⁸ https://www.schirn.de/fileadmin/_processed_/csm_DSH_Drawing_room_Roelof_Bakker_01_4d10023aeb.jpg

¹⁹ <https://cdn.sanity.io/images/t4nswwt6/production/b90ef60807c6ad85efadbc96a237ed1b18bee8ae-1469x1000.webp?auto=format&fit=max&q=75&w=1469>

5-3. まとめ

Dennis Serve's House はこれまで得てきた部屋ごとの特徴を振り返るのに有効であった。内装に関しては Sir. John Soane's House や Dr. Jonson's House に比べ、装飾性が高く、1700 年代のジョージアン様式ではなく、その次の時代に見られるヴィクトリア朝のインテリアに見られるような「多様で多量」なイメージを受けた。ヴィクトリア朝の邸宅と異なる部分としては邸宅の中にジャポニズム・シノワズリの要素が見られない点である。このヴィクトリア朝的であると感じた室内装飾の豪華さはこの邸宅がユグノーというフランスからの移民であり、絹織工という商業によって富を築き上げた人物であることが関係しているのではないかと考える。Sir. John Soane も Dr. Johnson も文学者であり、確かに中産階級ではあるが富を築き上げたわけではない。いわゆる成金のような立場の設定のため、彼らの邸宅に比べ豪華になるのは納得できる。

6. Sambourne House

6-1. 施設概要



20

²⁰https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/6/64/Edward_Linley_Sambourne%2C_self_portrait_1891.png/300px-Edward_Linley_Sambourne%2C_self_portrait_1891.png

ここは風刺雑誌パンチのイラストレーターであった Linley Sambourne (1844 年～1910 年) の邸宅であり、1874 年に結婚した後、二人の子どもと住み込みの使用人と共にここに住み始める。Charles Dickens の邸宅と同様、地下 1 階と地上 4 階のタウンハウスである。地下はキッチン・貯蔵庫であったようだが、現在は受付とお土産ショップ、Sambourne House に関する動画を視聴できる空間に改装されている。1 階に Dining Room と Morning Room、2 階に Drawing Room、3 階に息子の Roy の寝室と主寝室、4 階には使用人の部屋と彼が仕事をする部屋がある。この仕事部屋はもともと t 息子 Roy の子ども部屋、その後は娘 Maud の部屋であった。彼女が結婚した 1899 年から仕事部屋となっている。ここでは Dining Room、Morning Room、The Drawing Room をとりあげる。

6-2. 調査結果

○Dining Room



Sambourne 一家は社交的な一家であり、食事とともに客をこの部屋でもてなすことが多かったようである。壁紙は当時流行していた William Morris の壁紙が使用されている。ちなみに、William Morris の壁紙が使用されているのはこの部屋だけでなく、他の部屋にも使用されており、Linley Sambourne が流行に敏感であったことが感じられる。壁には埋め尽くすほどの絵画と食器が飾っており、食器はジャポニズム・シノワズリの雰囲気のものであった。

○Morning Room



もともとは Linley Sambourne の仕事場であったが、仕事場を Drawing Room へ移動した後、主に彼の妻が使用する部屋となった。彼女は使用人の取り仕切りや手紙を書く、また客をもてなしたりした。この部屋は彼女の好みを強く反映しており、他の部屋に飾られているのが版画や写真が多いのに比べ、ここは油絵が飾られている。また、クッションには自身が刺繍をほどこすなど、自身の作品を飾ることをしていた。余暇を多く与えられていたヴィクトリア朝の女性たちにとって手芸は最適なたしなみであり、部屋に家庭的な要素をプラスした。

また、上右図に見られるような円形の凸型ミラーが他の部屋でも多く見られた。これは Sir. John Soane's House でも多く見られた。Sir. John Soane's House と Sambourne House は時代が共通しているわけではないため、いつの流行なのかは不明である。しかし、Museum of the Home における 1830 年の Drawing Room でも見られたもののため、Sir. John Soane が一足先に取り入れたのだと考える。

○Drawing Room



ヴィクトリア朝の家庭の中心とされていた Drwing Room であるが、それは Sambourne House でも同様である。くつろぐためのソファが暖炉周りに置かれ、またピアノも置かれ、家族で音楽を楽しんだことだろう。家庭内での音楽については Charles Dickens Museum の Drawing Room で言及したとおりである。この部屋にはとくに Linley Sambourne が収集したものが集まっており、ヴィクトリア朝らしい物で氾濫しつつも落ち着いた部屋となっている。

6-3. まとめ

Sambourne House は今回見学した邸宅の中で最もヴィクトリア朝らしさがでていた邸宅であった。ここで挙げるヴィクトリア朝らしさとは、過剰装飾と色調の暗さである。²¹インテリアのセンスの良さ＝自分の身分・アイデンティティを示すと考えられていたことによる芸術性の高さや居心地のよい空間を併せ持つ邸宅となっていた。また、1階から2階にかけて、客との社交の空間から家族の空間、個人の空間と段階を踏んで私的空間にいたる構造がヴィクトリア朝に生まれたプライベートを大事にする価値観を表していると感じた。

7. Leighton House

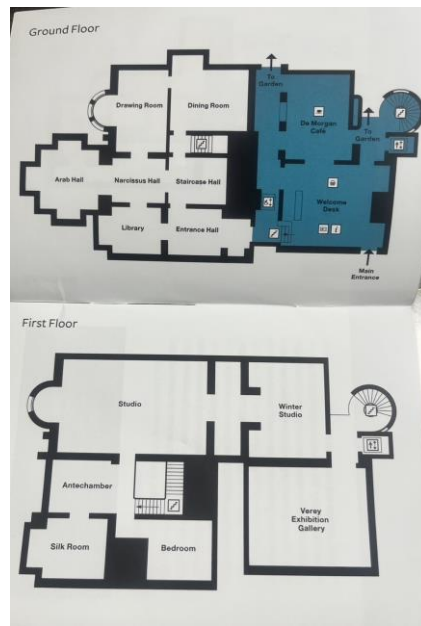
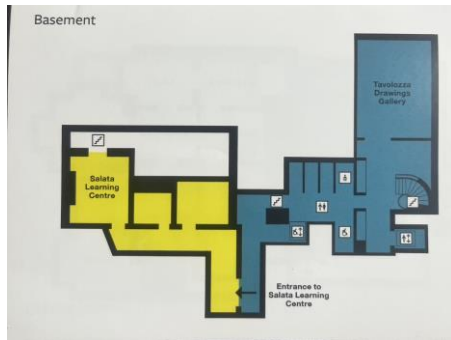
²¹ ルーシー・ワースリー、『暮らしのイギリス史』,2013年, p 194

7-1. 施設概要



ここは19世紀後半に活躍した著名な芸術家である Frederic Leighton〈1830年～1896年〉(上右図)の邸宅である。彼は1864年に空き家であったこの邸宅を手に入れ、1896年になる直前まで増築と改築を重ねた。彼は生涯独身であり、使用人を除けば一人で住んでいた。間取りは以下の通りである。ここでは家庭における女性の不在が室内にどのような影響をもたらすのかを調査したい。

²² https://d1inegp6v2yuxm.cloudfront.net/royal-academy/image/upload/c_limit,cs_tinysrgb,dn_72,f_auto,fl_progressive.keep_iptc,w_1200/ebvv7pj7ulvino9k21p1.jpeg



黄色と青く染まっている部分はギャラリーや受付、お土産ショップなどとして改装されてしまっている。ここでは1階にある Drawing Room、Dining Room をとりあげる。

7-2. 調査結果

○Drawing Room



本来、Drawing Room は客をもてなすための空間であったが、この邸宅においてはその機能は Studio が担っていた。そのため、ここは夕食後に女性客が男性たちの場を離れ、過ごす場としてしか使用されず、あまり使用されることはなかった。そのせいか他の部屋と比較してもやや装飾性に欠け、シンプルである。また、妻がいないためにそうする必要がなかったのか、ソファが置かれているわけでもなく、居心地の良さは追求されていない。

○Dining Room



Frederic Leighton は主にここで客人をもてなした。壁一面にジャポニズム・シノワズリが感じられる食器が飾られており、ヴィクトリア朝らしい装飾性を感じた。

7-3. まとめ

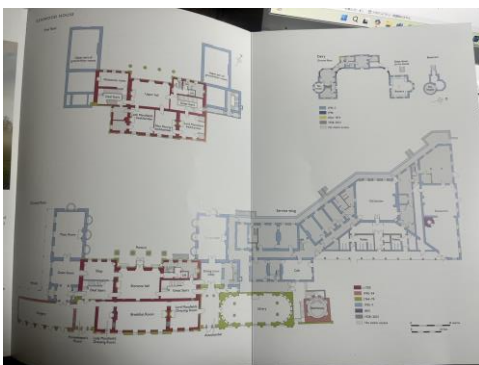
Leighton House は全体的にアラブの要素が多く取り入れられている点が他の住宅と全く異なる点である。ここで取り上げていないが、Staircase Hall と Narcissus Hall、Arab Hall、Antechamber は特にアラブの要素が強く出ており、タイルがふんだんに使われている。この点をふまえると、当時世界一のタイル生産国として誇っていたヴィクトリア朝イギリスらしい邸宅である。だが、一人住まいということもあってか、また芸術品として完成されている空間があるためか、私的空間と公的空間の境目が薄い印象を受け、ヴィクトリア朝的な家庭の居心地の良さは感じられなかった。

8. Kenwood House

8-1. 施設概要



ここに最初に家を建てたのは 1616 年にこの領地を購入した国王の印刷官である John Bill であった。この家は 1754 年にのち 1756 年から最高裁判所長官をつとめ、1776 年に初代マンスフィールド伯爵となる William Murray の手に渡るまで、建て直され、いくつかの手を渡っていた。彼の死後は彼の甥の手に渡った。後のマンスフィールド伯爵はスコットランドの Scone Palace を好んだため、断続的にしか訪れていなかった。20 世紀初期になると、Kenwood House は貸し出され、借主にはロシア皇帝ニコライ 1 世の孫である Michael Michaelovitch 大公などがいた。1910 年までに第 6 代マンスフィールド伯爵は Kenwood House を売却することを決め、初代アイヴリー伯爵である Edward Cecil Guinness によって購入された。現在は English Heritage によって管理されている。所蔵されている有名な作品としてはフェルメールの「ギターを弾く女」がある。ここは私の研究対象である中産階級の邸宅ではなく、上流階級の邸宅であるが、中産階級の邸宅との違いや類似点を探りたい。間取りは以下の通りである。私が訪問したとき、2 階は見るができなかったため、ここでは 1 階に位置する Dining Room、Breakfast Room、Music Room をとりあげる。



8-2. 調査結果

○Dining Room



この Dining Room は 2 代目マンスフィールド伯爵によってつくられた部屋である。初代マンスフィールド伯爵は客を Entrance Hall でもてなしていたが、2 代目はもてなすための専用の部屋がほしいと考えたからである。1796 年の目録によると、この部屋にはマホガニーのサイドテーブルが 2 つあり、その隣には台座の上に置かれた中国製の花瓶とワインクーラーが置かれていたという。招待客は大きなマホガニーのテーブルを囲み、座っていた。

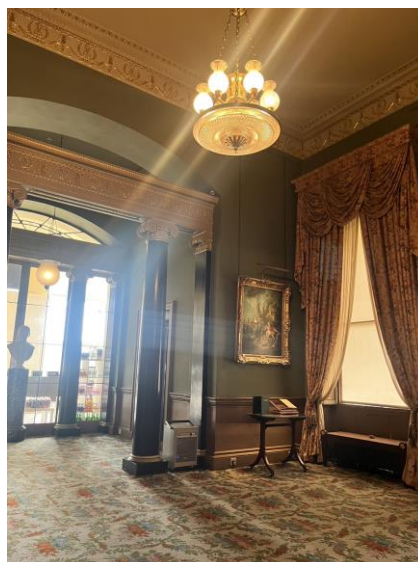
○Breakfast Room



この Breakfast Room はもともと Drawing Room と Parlour の 2 つの部屋で、どちらも Entrance Hall から直接出入りすることができた。Drawing Room は食後に過ごす部屋として、Palour は家族で過ごす部屋であった。そして、1796 年になると Outer Library と Inner Library と呼ばれるようになる。1815 年になると 3 代目マンスフィールド伯爵によって Book Room として 1 つにまとめられ、1831 年までに Breakfast Room と呼ば

れるようになった。上右図は 1913 年に撮影されたもので、3 代目マンスフィールド伯爵によって取り付けられた本棚があり、Book Room であった名残が感じられる。

○Music Room



この部屋は 1796 年の完成直後の目録には Music Room と記録されていた。夕食後に女性たちがお茶を飲んだり、音楽を聴いたり、庭を眺める空間であったという。上流階級においても音楽は女性と結びついていたことが分かる。部屋数をそこまで多く持つことができない中産階級はこの Music Room の要素を似た性質を持つ Drawing Room に取り入れたのだろう。

下図は 1913 年に撮影された写真である。今日に比べ、家具の装飾性が高く、ピアノも置かれていたようである。暖炉を中心にソファや椅子が並べられるなど、居心地のよい雰囲気である。



8-3. まとめ

今まで見てきた中産階級の邸宅とはまず明らかに規模感が異なり、中産階級が上流階級をうらやんでいた心情を実感することができた。この邸宅において、つくりの面で中産階級の邸宅と異なっていた部分としては

1つは地下がないことである。多くの中産階級の邸宅では地下に使用人が働く場所があったが、Kenwood House においてはメインの部屋（Entrance Hall や Dining Room など）をすべて合わせたほどの広さの使用人が働く場所 Service Wing が離れのようなかたちで邸宅の左側にあった。下図がその一部である。



中産階級の邸宅における地下は土地がないために仕方なく設けられたものである。当時の認識として、使用人は主人の目に付くべきではなく、また悪臭はキッチンからくるものだと考えられていた。臭いには効力があると考えられていたため、現在よりも忌避されていた。²³その結果、上流階級の邸宅において Service Wing は主人が暮す場からは遠い場所に設けられたが、中産階級の邸宅においてはそうもい

かない。地下が設けられ、使用人たちは隠された。

2つ目は Dining Room と Music Room の距離が離れていることである。この二部屋はほぼ対極に位置している。中産階級の邸宅では女性たちが引き下がる部屋は基本的に Dining Room に隣接していたが、Kenwood House はそうではない。広さ故に男女の領域が完全に分かれていたと感じた。

居心地の良さについては、この建物は邸宅として保存されているのではなく、美術観として保存されているため、当時の雰囲気をつかむことは難しかった。

9. Wallace Collection

9-1. 施設概要

²³ 前掲書, p 268

歴史

1797年 2代目ハートフォード侯爵が移住

その後、第3代と第4代はここに住むことはなく、第4代によってアートコレクションを保存する場所として利用

1870年 Richard Wallace が第5代ハートフォード侯爵からハートフォード・ハウスの賃貸借契約を引き継ぐ

1872年 大規模改修を行う

1875年 Richard Wallace が移住

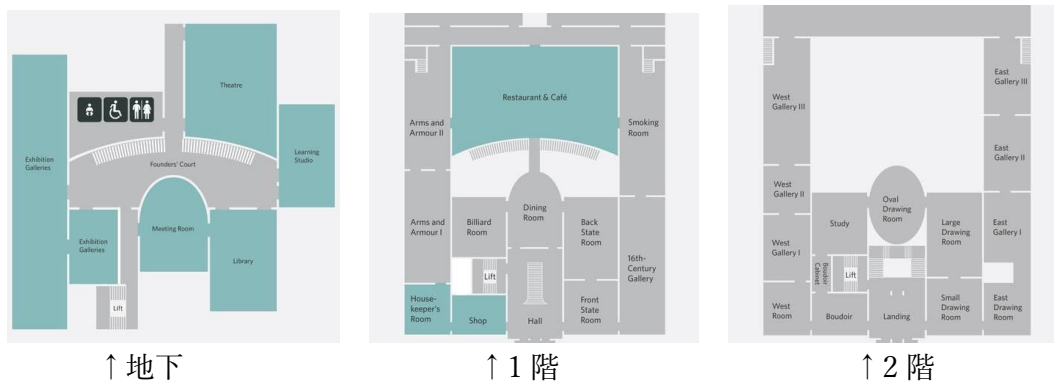
1890年 ウォレスはパリで死亡

1897年 Lady Wallace によってイギリス国民に遺贈される

1900年に博物館として公開



Wallace Collection はもともと 2 代目ハートフォード侯爵のものであり、3 代にわたって侯爵家の中で引き継がれた後、第 4 代ハートフォード侯爵の非嫡出子とされている Richard Wallace の邸宅となった。第 4 代ハートフォード侯爵が収集した品を中心に 14 世紀から 19 世紀後半までの油絵や王侯貴族の武具、18 世紀のフランス絵画などを見ることができる。有名な作品ではフラゴナールの「ぶらんこ」が所蔵されている。間取りは以下の通りである。ここでは、Front State Room と Back State Room、Dining Room、Breakfast Room、4 つの Drawing Room をとりあげたい。



9-2. 調査結果

○Front State Room Back State Room



↑ Front State Room



↑ 1890年の Front State Room



↑ Back State Room



↑ 1890年の Back State Room

この2つの State Room は邸宅の中でもっとも豪華な部屋であり、重要な人物を迎え入れる部屋でもあった。Front State Room はハートフォード・ハウスを訪れた者が最初に入る部屋であり、もてなしは Back State Room で行われた。

○Dining Room



←1890年の Dining Room

中庭に面した Dining Room は光が大きく取り入れられ、明るく開放的なデザインになっている。Richard Wallace と Lady Wallace は基本的にここで食事をとったという。

○Breakfast Room



←1890年の Breakfast Room

入り口にはいってすぐ左にあるのがこの Breakfast Room である。完全にお土産ショップにリニューアルされてしまっており、読み取れることは少なかった。

○4つの Drawing Room



↑ Small Drawing Room



↑ 1890年の Small Drawing Room

この部屋はレジャンス期とルイ 15 世治世初期の様式の間の変化を表現している。²⁴ Richard Wallace の時には、ここは Joshua Reynolds (1723 年～1792 年) の絵画が多く飾られていたため、Reynolds Drawing Room として知られた。



↑ East Drawing Room



↑ 1890年の East Drawing Room

この部屋に展示されている絵画の多くはアントワープに関係している画家の作品である。19 世紀最初の数十年間はハートフォード公爵夫人イザベラの居間であり、1807 年から 1820 年までジョージ 4 世が即位するまで、毎日ここでもてなした。

²⁴ レジャンスとは 18 世紀最初の 30 年間のフランスの美術様式であり、バロック様式からロココ様式の過渡期にある。



↑ Large Drawing Room



↑ 1890 年の Large Dining Room

ブル様式の家具とネーデルランド絵画で飾られたこの部屋の趣味は 18 世紀フランスで人気だった。この部屋と下述する Oval Drawing Room は接待に用いられていた。



↑ Oval Drawing Room



↑ 1890 年の Oval Drawing Room

この部屋にはルイ 15 世の治世の末の時代のデザインの机が置かれており、フランスロココ調時代後期の様式が部屋全体で感じられる。

このように各 Drawing Room にはテーマがあり、それにのっとって装飾されていたことが分かる。

9-3. まとめ

内装は美術館としてリニューアルされているため、掲示されている 1890 年に撮影された写真を見比べながらの調査となった。しかし、小さな白黒の写真では当時の部屋がもっていた雰囲気はつかみづらかった。しかし、家具の一部は展示されており、そこか

らこの邸宅はフランス的な要素が強かったことを知ることができた。Richard Wallace が暮らしていたときの様子が保存されているので、ちょうどヴィクトリア朝期に当たるが、ジャポニズム・シノワズリの影響が全く見られなかったことも気になった。あくまでも、流行に左右されていたのは中産階級のみであったということであろうか。また、中産階級との共通点としては邸宅と同様に 1 階には Dining Room と Breakfast Room が、2 階に Drawing Room が位置していた。

Ⅲ.おわりに

1. 調査を通して

今回、6 つ中産階級の邸宅を訪問する中でヴィクトリア朝中産階級の男性はそれ以前から引き続き家庭内でも社交を行っていたことが分かった。私は訪問前まで、ヴィクトリア朝において家庭内で社交を行っていたのは女性のみで、中産階級の家庭は男性にとっては完全にくつろぎの場として、社交の場としての機能は完全になくならずとも、クラブや劇場などに移っていたのではないかと考えていた。しかし、実際にはどの邸宅でも男性間の社交が話題にされていた。とくに Charles Dickens Museum と Dr. Jonson's House では具体的に彼らの家を訪れていた人物の言及がなされており、サロンのような物が形成されていた。このように考えていたほど、家庭は閉鎖的な空間ではなかったことを知った。

しかし、だからといって家庭は私的領域ではなく、公的領域であるとするには尚早であると考え。現在の研究では、女性のみが存在する場が私的領域であり、男性がいれば公的領域と考える研究も多いが、男性がいようともし話されている話題や振る舞いが政治や宗教、法など公的なものに関わっていなければ、それは私的領域であると考えからである。具体的に集まっていた人物が明らかにされていた Charles Dickens Museum でも Dr. Jonson's House でも話の内容までは言及されておらず、その判断はできなかった。

また、女性の社交であるが、考えていたよりも女性だけの社交の実態が今回の見学からは読み取ることができなかった。Drawing Room が主に女性の集まる場として紹介されていたが、それは Dining Room で男性も交えて食事と共に歓談したあと、女性が引き下がる場として説明されており、女性の社交は男性の社交の副産物のような印象を受けた。しかし、当時の家政本には女性同士の家庭招待会のマナーについて書かれていたこともあり、家庭内における女性だけの社交が行われていたのは事実であろう。それを読み取ることができなかったのは残念である。

今後の研究活動では、まず私的領域と公的領域の定義づけを行う必要があるだろう。手段としては当時の家政本や指南書などを通して女性が関わるべきでないとい

たのはどこまでなのかを探ることで当時考えられていた公的領域を明らかにすることができると思う。本調査を通して、家庭もその定義づけによっては公的領域になりえると感じたため、場所ではなく、女性が触れるべきでない話題に注目して文献を読み解いていきたい。

2. 反省

本調査を通して、8つの邸宅を調査したが、美術館として残っているものは内装が美術館としてリニューアルされてしまっているため、そこから昔の様子を読み解くのは説明書きがなければ困難であった。また、かつての様子が保存されている邸宅も焦点はその邸宅の主人に焦点があてられていたため、女性の姿を見るのは難しかった。幸い、Museum of the Home を最初に訪れたため、そこで得た家庭と女性の関わり知識のおかげで今回は学びを得ることができた。

この視覚だけでは得られない情報を本来であれば、館内スタッフに尋ねるべきであったのだが、自分の英語力不足にそれもままならなかった。本調査報告の内容も博物館の説明書きやパンフレットの内容が主であり、深みに欠けてしまったと考えている。今後、再び国外で調査を行う際には対象の事前知識を深めるだけでなく、語学力の習得にも力を入れ、より充実した調査を行えるよう努力したい。

3. 結び

本調査を実行するにあたり、資金面で援助したくださった中央大学文学部に感謝申し上げる。円安が進む中、学外活動奨学金は調査を実行するにあたって大きな助けとなった。また、テーマ決めから奨学金申請まで、様々なアドバイスをくださった石橋先生にも御礼申し上げます。

4. 参考史料

・ルーシー・ワースリー、『暮らしのイギリス史』,中島俊郎・玉井史絵訳, NTT 出版株式会社, 2013年

・吉村典子/川端有子/村上リコ、『ヴィクトリア時代の室内装飾 女性たちのユートピア』,LIXIL 出版, 2013年

・Cha Tea 紅茶教室、『図説 ヴィクトリア朝の暮らし』, Cha Tea 紅茶教室, 『図説 ヴィクトリア朝の暮らし』, 株式会社河出書房新社, 2015年